「おちゃのみずゆうびんきょく」遊びを通して
～コンピテンシーの基盤となる暮らしを考える～

◆企画：灰谷知子（附属幼稚園）
実践：灰谷知子・伊川千晶・大江由布子（附属幼稚園）

◆はじめに

園の暮らしの中で、年長児の遊びや存在の影響はとても大きい。本事例の対象である年中児は、1 学期より暮らしの中で、様々に年長児との関わりを重ねてきた。その中でも、互いの保育室をつないでいる廊下は、年長児の遊びの様子をじっと見たり、一緒に体験させてもらったりする大切な場所である。2 学期後半からは、年長児の姿を見て自分達でもやってみたいと遊びに取り入れたりすることもあった。取り入れ方は様々であり、子どもたちがどこに興味をもつのかなどを丁寧に探りながら、一緒に材料や場を考え、年中児なりに自分たちの遊びに取り入れ、遊びや生活が豊かになっていく面白さを感じられるようにと願い支えてきた。

本稿では、年長児の姿から子どもたちが心を動かし、年中児が自らの遊びや暮らしに取り入れていったプロセスを振り返り、コンピテンシーの基盤になることについて考察する。

◆活動・遊びの紹介

3 学期はじめ、年長児が廊下で郵便局ごっこを始めた。正月に年賀状のやり取りなどを楽しんできたのであろう。切手やハガキを売る郵便局やポストができて、年中児の中でも興味をもつ子どもが現れた。早速ハガキを買って友達に手紙を書く人や年長児と一緒にハガキ作りを楽しませてもらう人がいた。

廊下で開かれた年長児の郵便局

◆事例と考察

自分たちのゆうびんきょくをつくりたい　　4 歳児 1 月

ある日、T 児が「郵便局を作りたい」と言った。自分たちの保育室の近くにも郵便局はあった方がいい、そうすれば皆が手紙を出せるから、ということのようだった。早速、どの場所にするか担任と相談し、お店の台を廊下に運び始めた。「郵便局」と話す T 児の姿、担任と一緒にお店台を運ぶ姿を見て、関わってきた子どもたちが「ポストを作るといいよ」とアイディアを出す。ポストってどんなものか、と数人で話していると、「赤いのがいい」「穴が開いている」と話し始めた。そこで、教材室に行き、箱を選ぶと「穴は年長さんがギコギコしていた」とのこと。年長児が使う段ボールカッターのことを見ていたようなので、担任と一緒に年長児に段ボールカッターを借り、お互いに箱を支えあいながら、ギコギコと道具を使って穴を開けてポストを作った。看板も必要だと誰かが言い、どんな名前にしようかと相談して「おちゃのみずゆうびんきょく」と書いた画用紙をお店台に付けた。すると、年長 D 児がやってきて、ビニール袋にたくさん入った「ハガキ」を分けてくれた。お店台にハガキをぶら下げ、ポストをお店に置き、ゆうびんきょくが開店した。担任がハガキを書くと、子どもたちは次々と配達に出かけていった。

おちゃのみずゆうびんきょく

【考察】
年長児の郵便局で一緒に遊ばせてもらっていた T 児が、この遊びの楽しさを、自分の身近な保育室で、友達や担任と一緒に味わいたいという思いが感じられたので、T 児なりのモノづくり、場づくりを支えたいと担任は考えた。T 児と担任とがお店台を運ぶ様子をみて、興味をもった子どもたちがいたので、いろいろな子どもの思いが重なり合って自分たちのゆうびんきょく作りを実現できるよう援助した。ポスト作りでは、赤く、穴があいてあるという特徴を捉え、年長児と同じように段ボールカッターを使ってみようとしていた。年長児の遊びを真似て、自分たちなりにモノや場を作りあげる中で、自分の思いが実現していく充実感を味わうことは、本学が示すコンピテンシー構造のひとつである「創造的思考力」の「新たな価値や優れた考えを生み出す力」につながると考える。
また年中児の様子を見てハガキを分けてくれた年長児の存在も大きい。いろいろな人と関わり合いながら、思いが実現されていく経験は、本学が示すコンピテンシー構造のひとつである「協働性」の「他者と役割を分担したり、助け合ったりする」ことにつながると考える。

「ポストにはお金を入れてください」　　4 歳児 1 月

翌日以降もポストと看板はお店台の近くに残しておいたところ、また新たな子どもがゆうびんきょくの場で遊ぶことが続いた。ハガキが届くと我先にとハガキを受け取り、すぐに届けにいく子どもたち。担任も、たくさんの手紙を書いてゆうびんきょくに届けた。子どもたちは、「ポストにはお金を入れてください」と言い、ハガキを受け取ると宛先の友達や教師などに届けにいった。ハガキを書く担任の横で「次は誰にかいているの？」と心待ちにする子どももいた。

ポスト

【考察】
「ポストにはお金をいれてください」という姿が興味深い。ハガキをすぐにでも受け取り、届けにいきたい。そんな子どもたちの思いが伝わってきたので、担任は何枚もハガキを書いた。友達に届けたい、友達と関わりたいという子どもたちの思いが、ハガキというモノを介して相手に届いていったように感じる。ポストにはお金を入れることにしようというアイディアは、一緒に遊ぶ子ども同士でいつのまにか共有されていった。一緒に遊ぶ友達の思いを感じ合って遊びを進めていくこのような体験は、本学のコンピテンシー構造「協働性」の「他者と役割を分担したり、助け合ったりする」基盤となっていくことだと考える。
T 児の思いから始まった「おちゃのみずゆうびんきょく」だが、いろいろな子どもたちが関わり、互いの思いを感じながら遊びが続いた。モノや場を残すことで、その余韻がいろいろな子どもに伝わり、また新たなアイディアが重なり合っていくような環境構成を教師が心がけることも、子ども同士が他者と関わり合う上で大切なことだと考える。

「また来てね」「楽しかったよ」　　4歳児1月

この日「親子体操」という園の行事で体操のお兄さんが幼稚園にきた。登園後、親子一緒に遊戯室で親子体操を楽しんだ後、保育室に戻り、普段通りに遊び始めた。H児は担任に「楽しかった、また来て欲しいな」と話し始めた。周りで遊んでいた他の子どもたちも、楽しかったことやまた会えるかなと口々に話し始めた。そしてH児は「おちゃのみずゆうびんきょく」を見て、手紙を書きたいと言った。急いで担任と『お金』を作りはがきを買いに行くと、「僕は字が書けないから、先生書いて」と言う。「また来てね」「たのしかったよ」「H児（自分の名前)」などH児の言葉を聞きながらハガキに文字を書くと、最後に「絵を描きたい」と言い、自分の名前の横にお日様の絵をペンで描いた。できたハガキを持ったH児は急いで体操のお兄さんに渡しにいった。体操のお兄さんが部屋から出てくるのを待つ間、椅子に座り、ハガキの文字をゆっくり指でなぞるH児。しばらくしてお兄さんに会えると、満面の笑顔でハガキを渡しながら「また来てね」と言葉をかけていた。

【考察】

親子体操では、親子でたくさん身体を動かし、ふれあい、全身から楽しさが伝わってくる様子がたくさんあった。余韻が残る中、子どもたちは保育室に戻り、自分のやりたい遊びを始めた時の事例である。

H 児はこの頃、ふと話したいことが浮かんだ時にあふれるように担任に話すことが増えていた。この日も、クラスの友達と一緒に体験した親子体操が本当に楽しかったと、保育室に戻るなり次々と話し始めた。そんなH児のからだから溢れる思いに共鳴するかのように、周りの子どもたちも次々と話し始めたので、担任は皆の思いを受けとめようとした。この子どもたちの思い、お兄さんにも直接伝えたいと担任が思っていた時に、H 児はハガキを書くことを選んだ。H 児の思いを残さず伝えたいと担任も願いながら、H 児の言葉をハガキに書いた。自分の名前の横に絵を書き足した姿や担任が書きとめた文字をなぞる姿からも、このハガキにH児自身の思いが込められていることが伝わってきた。H児が直接ハガキをお兄さんに手渡し、そして見せた満面の笑顔に、教師も思わず良かったと声をかけていた。

ハガキを通して自分の思いを伝えようとする、受けとめてもらえたと実感する、ということは本学のコンピテンシー構造「他者理解」の「様々な他者の立場や考え方などを推測したり、理解すること」の基盤となると考える。

◆おわりに　コンピテンシー育成の観点より

年中児にとって、園の暮らしの中での年長児との関わりで得られる体験は、一方的にしてもらうということだけではない。じっくり見る時間、一緒に楽しませてもらう時間の中で、一人ひとりの子どもが感じること、そして取り入れることは様々である。教師は、その子自身の心が動き、自ら周りのモノ、人、コトと関わろうと動き出す時を逃さず丁寧に捉え、支えることが大切だと考えている。

年中児なりに自分たちの遊びに取り入れていった遊びのプロセスを振り返ると、教師の支えを受けながらやりたいことを実現させていく過程で、子どもたちは身の回りのモノ、人、コトとの関わりを広げていることがわかる。このような経験を積み重ねていくことが、他者と関わり合いながら自分たちの暮らしを創造していく年長児の姿へとつながり、コンピテンシーの基盤となっていくと考える。